

## トマス・アキナス『神学綱要』におけるキリスト論

### —『神学綱要』抄訳と注解—

Christus in 'Compendio Theologiae' Sancti Thomae Aquinatis  
— Translatio et Interpretatio —

山口隆介  
Yamaguchi Ryusuke

#### 要 約

トマスのこれまであまり日本では研究されてこなかった『神学綱要』 *Compendium Theologiae* におけるキリスト論のごく一部を抄訳しつつ、解釈を施す。キリスト論の核心部がわずかな章でまとめられていることを示し、『神学綱要』が、トマス思想の要点をつかむのに有効に活用できるテキストであることを例示する。

**Key Words** : *Compendium Theologiae* 『神学綱要』 トマス・アキナス キリスト論

#### 1. はじめに

以下、『神学綱要』 *Compendium Theologiae* の第1部「信仰について」より、キリストについて論じた箇所の一部を訳し、註釈を施す。定本は文献表のテキスト1. に当たる Marietti 版の *Compendium Theologiae* である。章は訳ごとに明示した。省略もまた表示した。

#### 2. キリストのペルソナ

理解の前提となるキリストにおけるペルソナの統一について、あらかじめ述べておく。キリスト教の教義では、神は唯一の神にして、父なる神のペルソナ、子なる神のペルソナ、聖霊なる神のペルソナという3つのペルソナである、そして、子なる神が人間となった、すなわち、キリストは完全なる神にして、完全なる人間であり、完全なる人間であるがゆえに、十字架上の死を遂げることで全人類の罪を償うことができ、完全なる神であるがゆえに復活することができた、と信じられている。すなわち、子なる神のペルソナのもとに、神性と人性が統一されていると信じられているのである。

このペルソナの統一とはどのようなものであるかを論じるのが、以下のトマスの議論である。まず、『神学綱要』の第210章を抄訳する。この章は、神の御子のうちに2つの基体があるとは考えられない、ということ論じるものであるが、これは、子なる神のうちにある2つの本性、すなわち神性と人性は、おたがいに独立した2つの実体、すなわち基体であるとは考えられない、ということである。

## 2.1 訳1 第210章「彼〔神の御子〕のうちに2つの基体があるとは考えられないこと」(抄訳)

……他の人々は……不適切さを避けようとして、キリストのうちでは靈魂が体と1つになった、またそのような合一のうちにある人間が出来上がったと考えた。彼〔出来上がった人間〕が、神の御子によってペルソナの一性のうちに受け取られていると彼ら〔上述の他の人々〕は言う。このような「受け取り」という概念により、彼ら〔上述の他の人々〕はかの人〔出来上がった人間〕を神の御子であると言う。そして神の御子がかの人〔出来上がった人間〕であると言う。そして、これまで語られてきた受け入れは、ペルソナの一性をその極みとして定められたものであるもので、〔上述の他の人々は〕キリストのうちでは神と人間に一なるペルソナがあると告白するが、この人間は、靈魂と体から成り立っていると〔上述の他の人々は〕言っており、人性のある種の基体、あるいはヒュポスタシスであるので、〔上述の他の人々は〕キリストのうちに2つの基体、2つのヒュポスタシスがあると考えている。1つは人性の基体で、創られた時間的なものであり、もう1つは神性の基体で、創られざる永遠のものである……

以上の立場は、ネストリウスの誤りから、言葉の上では退いているに見えても、それでも、これ〔以上の立場〕を内的によく調べるなら、ネストリオスと同じところに滑り落ちている。というのは、ペルソナが理性的という自然本性を有する個体的実体以外の何ものでもないことは明らかだが、人間の自然本性は理性的であり、それゆえ、キリストのうちに、人性のなんらかのヒュポスタシスあるいは基体が置かれているというまさにそのことによって、キリストのうちになんらかの時間的な創られたペルソナは置かれているからである。すなわち、基体あるいはヒュポスタシスという名で表されているのはこのこと、すなわち個体的実体である。したがって、キリストのうちに2つの基体あるいは2つのヒュポスタシスを置く人たちは、言っていることを理解しているならば、2つのペルソナを置かなければならない。

さらにまた、基体を異にするものはなんであれ、あるものに固有のものどもが別のものに適合し得ないという状態にある。したがって、神が十字架に架けられたと言うことや、あるいは乙女から生まれたと言うことはできなくなる。これがネストリウス派の不敬虔である。

## 2.2 註釈

ここでは、トマスの言っているヒュポスタシス、あるいは基体がどのような意味かが明らかになる。

すなわちペルソナは「理性的という自然本性を有する個体的実体以外の何ものでもない」。それゆえ、まさに現代語の人格と、トマスが用いているペルソナは重なることが分かる。だからこそ、「人間の自然本性は理性的である」と言うのである。それゆえ、キリストという一個の実体のうちに、「人性のなんらかのヒュポスタシスあるいは基体が置かれている」ということは、すなわち、「キリストのうちになんらかの時間的な創られたペルソナ」がある、つまり、子なる神のうちにもう一つの人格があるということになる。そして、トマスは言う。「すなわち、基体あるいはヒュポスタシスという名で表されているのはこのこと、すなわち個体的実体である」。

だから、「キリストのうちに2つの基体あるいは2つのヒュポスタシスを置く人たちは、言っていることを理解しているならば、2つのペルソナを置かなければならない」ということになり、これはネストリウスの異端と同趣旨であるがゆえに、排除されるべきであるというのがトマスの考えである。

トマスは、上に訳した箇所の後で、排除されるべき理由を述べているが、それはネストリウスの異端を直接論駁している個所で述べていることと同工異曲であるので、そちらを引用する。「……この誤りを排除するために……使徒信条には、御子のペルソナについて言及し、こう続けている。「彼は聖霊によって宿り、生まれ、苦しみを受け、死に、復活した」と。すなわち、人間のものを神の御子について宣言すべきではない。もし、神の御子と人間とに同一のペルソナがあるのでなければ。あるペルソナに当てはまるものは、それとは別のものについては、それぞれのもとしては宣言されない。パウロに当てはまるものは、ペトロについてはそれぞれのもとしては宣言されない」

上述したように、イエスは完全な人間であるがゆえに十字架上の死で全人類の罪を代わって償うことができたのであり、完全な神であるがゆえに復活することができた。すなわち、人類は罪をゆるされ、死んだ後、復活する道が開かれたのである。しかし、キリストの中に子なる神としてのペルソナと、人間の人格が別に存在するのなら、そのようなことが言えない。パウロのしたことはペテロのしたことは別であるのと同様に、十字架上の死は人間の人格が経験した死であって、子なる神のペルソナの死ではない、すなわち、この時、子なる神は死ななかったということになるからである。したがって、キリストの十字架上の死が復活に結びつくことはなく、すなわち、人類の救済にも結び付かない、というのがトマスの論駁である。

### 2.3 訳2 第211章「キリストのうちに唯一つの基体があり、そして唯一つのペルソナがあること」(抄訳)

したがって、キリストのうちに、神と人間との一なるペルソナだけがあり、それだけではなく、基体またはヒュポスタシスも一である。しかし、本性は1つではなく2つである。このことを証明するためには、このペルソナ、ヒュポスタシス、そして基体という語が、ある種の無傷なものを指し示していることを考えなければならない。すなわち、手あるいは肉あるいはなんであれ他の部分が、ペルソナあるいはヒュポスタシスまたは基体と言うことができず、この全体、すなわちこの人間全体がそう〔ペルソナあるいはヒュポスタシスまたは基体〕だと言えるが、一方、実体と付帯性からなる個体に共通の名称、例えば、「個体」とか「個々のもの」とかは、全体にも部分にも適用させられる。すなわち、部分は、付帯性と共通する何かを有する。すなわち、それ自体として実在するのではなく、他のものに内在する、たとえ、その仕方は様々であっても……

……また、さらに、なんらかのものの結びつきは、それ自体として考えるなら、時になんらか完全なものを生ぜしめる、すなわち、互いに別であるものが加わり、加えられることで、なんらか完全なものを成り立たせる、例えば、石のうちに4元素が混合して、なんらか完全なものを成

り立たせている場合のように。そこでは、諸元素から成り立っているものは石のうちでは基体あるいはヒュポスタシスと言われ得る。これ〔諸元素から成り立っているもの〕はこれこれの石であるが、ペルソナではない。というのは、理性的という自然本性のヒュポスタシスではないからである。しかし、諸元素の動物のうちでの複合は、なんらか完全なものを成り立たせず、部分を、すなわち体を成り立たせる。というのは、動物が完成するには何か他のものが加わらねばならないからだ。すなわち、靈魂が。それゆえ、動物のうちでの諸元素の複合は、基体あるいはヒュポスタシスを成り立たせず、これこれの動物全体が、ヒュポスタシスあるいは基体である。しかしながら、このことゆえに、動物のうちでは諸元素の複合は、石のうちでの場合より無意義なわけでもなく、さらにより有意義である。より高貴なものへの秩序をなしているからだ。

## 2.4 註釈

2.1では、トマスにおけるヒュポスタシスは、人間に関しては、理性的という自然本性を有する個の実体すなわちペルソナを指すこと、すなわち人格そのものを指すこと、そして、キリストにおいては子なる神としてのペルソナを指すこと、すなわち、普通の人間とキリストのいずれにおいても、ヒュポスタシスとはペルソナを指すことを明らかにした。そして、一人の人間においてペルソナが一であるように、「キリストのうちに、神と人間との一なるペルソナだけがあり、それだけではなく、基体またはヒュポスタシスも一である」。

2.3では、トマスの述べるヒュポスタシスおよび基体がどのようなものであるかを明らかにする手がかりが得られる。トマスは言う。「なんらかのものの結びつきは、それ自体として考えるなら、時になんらか完全なものを生ぜしめる」。そして「諸元素から成り立っているものは石のうちでは基体あるいはヒュポスタシスと言われ得る」。すなわち、無生物は、諸元素が複合しているだけで、完全な全体となる。無生物の場合は、諸元素の複合体がそのままヒュポスタシス、すなわち基体である。しかし、動物の場合はそうではない。「諸元素の動物のうちでの複合は、なんらか完全なものを成り立たせず、部分を、すなわち体を成り立たせる」に過ぎない。動物の場合は、諸元素が複合体がそのままヒュポスタシスとは言えず、そこに生命がなければならない。だからこそトマスは、「動物が完成するには何か他のものが加わらねばならないからだ。すなわち、靈魂が」と言うのである。

しかしながら、トマスは続けて言う。「しかしながら、このことゆえに、動物のうちでは諸元素の複合は、石のうちでの場合より無意義なわけでもなく、さらにより有意義である。より高貴なものへの秩序をなしているからだ」。ここでトマスが言わんとしていることは、次のように解釈することができると思われる。諸元素の複合体、すなわち動物の身体は、より高貴なもの、すなわち生きている動物全体を成り立たせる秩序のうちにあつて、それがなければ生命が成立しないという位置づけを持っている。もう1つの可能な解釈は、靈魂という高貴なものへの秩序、すなわち靈魂との関係にあるということであるが、いずれにせよ、身体なき生命は考えられず、身体は生命の成立に重要な役割を果たしているという考えが根底にあると解釈することができるだろう。

### 3. キリストにおける統一性

#### 3.1 訳1 第211章「キリストのうちには唯一つの基体があり、そして唯一つのペルソナがあること」(抄訳)

それゆえに、他の人間たちの間では靈魂と体の合一がヒュポスタシスと基体とを成り立たせている。というのは、この2つ〔靈魂と体〕の他に何も無いからである。そして主イエス・キリストのうちでは靈魂と体の他に第3の実体加わる。すなわち、神性が。したがって、体と靈魂とが組み上がってできたものは、それがペルソナでないと同様に、特に基体あるいはヒュポスタシスではない。基体、ヒュポスタシス、ペルソナであるのは、3つの実体、すなわち体と靈魂と神性から成るものである。そしてそうであるなら、キリストのうちには、一なるペルソナだけが存在するように、1つの基体、1つのヒュポスタシスがある。

#### 3.2 註釈

動物の場合は、靈魂と身体の合一がヒュポスタシスを形成する。そして、動物の一種である人間の場合も同様に、靈魂と身体の合一がヒュポスタシスを形成する。

人間の身体は諸元素の複合体だが、諸元素の集まり自体が人間であるのではない。たとえば、死んだ瞬間の人体は、物質的には生きた人間と違いはないはずであるが、そこに我々は、もはや人格を認めない。

とまれ、普通の人間の場合、ヒュポスタシス、すなわち個体的実体としての人間は、靈魂と体の統一体である。すなわち、身体は生きている人間全体か、靈魂への関係のうちでその役割を果たす。

このような普通の人間に対し、キリストの場合のヒュポスタシスは、トマスによれば、靈魂と体、そして神性との統一体である。

#### 3.3 訳2 第211章「キリストのうちには唯一つの基体があり、そして唯一つのペルソナがあること」(抄訳)

しかし、靈魂が体に加わる原理と、そして神性が両者〔靈魂と体〕に加わる原理とは異なる。すなわち、靈魂は、体に対し、その生じつつある形相として加わる。それゆえ、これら2つから1つの本性が成り立ち、これ〔本性〕は人性と言われる。しかし、神性は靈魂と体に、形相として加わるのではなく、部分として加わるのでもない。すなわち、以上のことは、神は完全だということに反するからである。それゆえ、神性と靈魂と体から、1つの本性が成り立つというのではなく、神性〔神の自然本性〕そのものがそれ自体として無傷で純粋なものとして生じており、把握できず、言い表すこともできないある仕方で、靈魂と体から成り立っている人性を自分に取り入れたということになる。これは、それ〔神の自然本性の〕無限の能力から発した。すなわち、我々は、ある能動的作用者がより大きな能力を有するほど、それだけなんらかの道具を、なんらかの業を完成させるのに使うようになる。それゆえ、神の能力が無限であるので、無限でありかつ把握できないように、キリストが人性を、あたかも、人間の救いの業のためのある種の道具で

あるかのように、自分に合一させたやり方もまた、我々には言い表すことができず、神の被造物とのあらゆる他の合一を超えている。

そして、かつて我々が言ったように、ペルソナ、ヒュポスタシス、そして基体はなんらかの無傷なものを指しているのだから、キリストの神性〔キリストが現実的に神としてあること、キリストの神としての現実存在〕が、霊魂が人間の複合の場合にそうであるように部分であって、なんらかの完全な全体でないなら、キリストの一なるペルソナは、神性〔キリストが現実的に神としてあること、キリストの神としての現実存在〕の側にだけ基づくのではなく、3つのものから成るあるものでもあった。また人間のうちにペルソナ、ヒュポスタシスまたは基体が、霊魂と体が組み合わさっているなんらかのものであるように。しかし、神性〔キリストが現実的に神としてあること、キリストの神としての現実存在〕は、なんらかの無傷なものであり、ある種の言い表し得ない合一によって人性〔現実的に人間としてあること、人間としての現実存在〕を取り入れるものであるのだから、ペルソナは神性〔キリストが現実的に神としてあること、キリストの神としての現実存在〕の側に基づき、ヒュポスタシスまたは基体も同様だが、一方、霊魂と体は、神のペルソナのペルソナ性〔理性的存在であること〕に引き込まれて神の御子のペルソナとなる……

### 3.4 註釈

霊魂と身体が統一体が人間であり、これはまた人性と呼ばれる。人間の場合は、霊魂が身体が形相であって、それゆえに、統一体としての人間から見れば霊魂は部分である。身体がヒュポスタシス、すなわち人格全体にとって部分であるように、霊魂も人間のヒュポスタシスにとっては部分である。

しかし、キリストの場合、神性は、統一体としてのキリストの部分ではなく、かつまた、霊魂と身体に対する形相でもない。人間の霊魂は、身体と合一し、人間という統一体を形成するのでなければ完全でないのに対して、神性は、それ自体で完全だからである。

神性がペルソナの言わば中心、ペルソナの本体であって、霊魂と身体はそこに取り込まれることで、神の子のペルソナとなる。

後述する個所で、トマスはこう言う。「キリストのうちの、人性にのみ関わるものはすべて、創られたものである。さもなくば、キリストのうちに、人間性〔人性〕の、神性とは違う本性はないことになるだろう。しかし、神の言葉のヒュポスタシスあるいはペルソナは創られざるものであり、これは2つの本性のうちにあって1つである。以上の理由から、我々はキリストが被造物だとは、キリストの名で意味されるのはヒュポスタシスなので、端的な言い方では言わないのである」。

すなわち、キリストにおいて人性に属するもの、すなわち、霊魂と身体が合わさったものは、被造物であり、キリストのうちに於ける、神性と区別された人性を形成する。この意味でキリストは完全に人間だが、キリストの人性は、子なる神のペルソナの一部に取り込まれているということになる。

また、人間における靈魂と身体との関係は有限なものとの関係であるが、神性と、靈魂および身体すなわち人性との関係は、無限なものとの関係である。

#### 4. キリストの人性ゆえの限界と神の無限性との両立

##### 4.1 訳1 第215章「キリストの恵みが無限であることについて」(抄訳)

その恵みが無限であるということは、キリストに固有である。というのは、洗礼者ヨハネの証言にあるように、これだけという程度を定めず、神は人間キリストに霊を与えられる。すなわち、『ヨハネによる福音』第3章〔第34節〕で言われているように。しかし、他の者たちには、ある程度までだけ霊が与えられる。そして、これが合一の恵みに関わることであるなら、言われたことは一切疑いを容れない。すなわち、他の聖人たちに与えられるのは、なんらかの賜物の流入による分有で、神々に、あるいは神の子らであるということである。これ〔分有によって神の子らであること〕は、創られたものであるがゆえに、他の創られたものと同じく、それは有限であらねばならない。しかし、人性という面での〔人間である限りでの〕キリストに与えられたのは、分有によらず、自然本性によって〔ありのままに〕神の子であることである。そして、合一そのものによって、〔キリストは〕無限の賜物を受け取ったのである。それゆえ、合一の恵みは、どんな疑いもなく無限である。

##### 4.2 註釈

トマスは、恵みを2つの種類に分ける。まず、神との合一の恵みに関しては、キリストは、無限に得ている。他の聖人は「分有によって」神の子であるのに対し、キリストは分有ではなく「自然本性によって」神の子だからである。ゆえに、他の聖人は、有限の恵みを得ているのに対して、人性という面でのキリストは、人間であるという点ではほかの聖人と同じであっても、無限の恵みを得ている。

##### 4.3 訳2 第215章「キリストの恵みが無限であることについて」(抄訳)

しかし、能力態的な恵みについては、無限かどうか、疑いがあり得る。すなわち、このような恵みもまた創られた賜物なので、有限の本質しか有しないと宣言しなければならない。それでも、3つの根拠で無限だと言うことができる。第1に、〔恵みを〕受け取る側に基づいて。すなわち、創られた自然はなんであれ受容力が有限であることは明らかである。たとえ、無限の善を認識と享受で受け取ることができるとしても、それ〔無限の善〕を際限なく受け取るわけではない。したがって、どんな被造物でも、受容力に、その種と自然本性によって定まった限度がある。しかし、これ〔限度〕は神の権能に対し、より大きな受容力を持つ被造物を創れないように定めることはない。しかし、そうなったら、種として同一の自然本性を有するものではない。3に1が加われば、別種の数があるだろうように。したがって、ある人に神の善性から、その種の自然本性的な受容力の分を超えて与えられる時、彼〔ある人〕に、〔さらに〕贈られた限度によって与え

られているように思われる。しかし、自然本性的な全許容量が満ちる時、彼に贈られた限度によって与えられているようではない。というのは、たとえ、受容する側にある限度であっても、与える側にある限度ではないからである。彼〔与える者〕は、与える準備がすべて整っている。器を川に入れる人が、限度なしに水が用意されているのを、たとえ、一定の量の器でもって限度内ですくい取るのだとしても、〔無限の水を〕見る場合のように。そうであるなら、キリストの能力態的な恵みが有限であるのは、ゆえに、本質によるものである。しかし、無限に、限度なく与えられていると言われるのは、創られた自然本性が受容できる限り与えられているからである。

また、第2に、受け取られた賜物そのものに基づいて……キリストの能力態的な恵みは、本質によって有限だったが、それでも限界や限度がなかったと言われるのは、恵みという性格に属し得たものはなんでも全体的に、キリストが受け取っていたからである。また、他の人々は、全体を受けることはなく、ある人はこれこれ、別の人はこれこれというように受けた。「すなわち恵みの間には様々な区別がある」と、『コリントの教会への手紙 一』第12章〔第14節〕で言われているように。

また、第3には、原因という面に基づいている。すなわち、原因のうちにはなんらかの仕方でも結果が含まれている。したがって、無限の力が流れ出す原因が加わったものはなんでも、限度なしに流出させられるものであり、そしてなんらかの意味で無限である。例えば、水を無限に湧き出させられる泉があるとしたら、水を限度なく無限に有するとある意味では言われたらろうように。したがって、キリストの靈魂は、無限にして限度なき恵みを、御言葉が御自分と1つになってくれているというまさにそのことゆえに有しており、このことは被造物の流出全体の、減ることなき無限の始原だということである。

#### 4.4 註釈

キリストにおける神との人々への恵みが無限であるのに対し、キリストの能力的な恵みについては、トマスは、人性の有限性のために限界があると考え。先に述べたように、トマスの考えでは、キリストの人性は被造物であるので、受容力に限界がある。しかし、3通りの観点から、キリストの人性の受けている恵みは無限であるとトマスは言う。第1には、創られた自然本性が受容できる限り、恵みを与えられているがゆえに、人間キリストに対し恵みは限度なく与えられていると言われる。第2に、恵みという性格を有するもの、すなわち、恵みと言えものはすべて、全体的に、人間キリストは受け取っていたという意味で言われる。第3に、人間キリストがその靈魂において受けている恵みは、神の言葉と自身が一つであることで有している、すなわち、恵みの無限の源泉である神と自身が一つであることでキリストの靈魂は恵みを得ているという意味で、人間キリストの受けている恵みは無限であると言われる。

さらに解釈を付け加えるなら、人間キリストは、人性が被造物であるという意味で被造物としての限界を被っているが、恵みが必要とされるところでは、恵みを人間にとっては十分なだけいっつでもどこでも得ることができたがゆえに、無限の恵みを得ていた、と言えるということになる。



## 5. キリストにおける知

### 5.1 キリストの神性における知と、人性の神性における知

#### 5.11 訳1 第216章「キリストが知恵に満ちていることについて」(抄訳)

したがって、また、キリストが知恵に満ちていることについて語らなければならない。そうであるなら、まず、考えねばならないのは、キリストのうちには2つの本性が、すなわち神性と人性とがあり、そのいずれに関係するものであっても……キリストのうちでは対になる。そして、神性の知恵はまた人性にも当てはまる。……したがって、キリストのうちには、2つの自然本性に応じ2つの知恵があると宣言しなければならない。すなわち、創られざる知恵、彼〔キリスト〕に神であるがゆえに相応しいそれと、創られた知恵、彼〔キリスト〕に人間であるがゆえに相応しいそれと。そして、神の御言葉もまた神である限り、御父により生み出された知恵もまた神である。……そして、神の御言葉は完全で一である……それゆえ、必然的に、神の言葉は、父なる神の知恵の完全な宿りであり、すなわち、父なる神の知恵のうちに、生み出されたものではなく保たれているものはなんでもすべて、宿され生み出されたものとして言葉のうちに保たれるようになる……

人間キリストにはまた、2つの知がある。1つは神の形のそれ〔知〕で、神を本質によって見ており、そして他のものは神のうちで見ていることによる。神御自身もまた御自身を理解することで、他のすべてを理解するのと同じく。この直視によって神御自身もまた至福であり、完全に神を楽しむ〔享受する〕理性ある被造物すべても至福である。それゆえ、キリストは人間の救いの元締めである……ので、以上のような知はキリストに対し、元締めに相応しいだけ相応しいと言わなければならない。また、〔以上のような知は〕始原は動かし得ないものでもあり、力という点で最も優れていなければならない。したがって、そのうちで人間が至福になり永遠に救われるあの神の直視が他の者たちに増してキリストにすぐれて相応しかったのは当然のことだ。〔これは〕すなわち動かし得ない始原に〔相応しかった〕ということでもある〔のだから〕。

また、動かし得るものの、動かし得ないものに対する差異は、動かし得るものは固有の完全性を、動かし得るものである以上、始めから有しているわけではない〔始めは有していない〕が、時間が進んでそれを達成するのである一方、動かし得ないものは、そういうものである以上、存在の始めから常にその完全性を保っている。したがって、キリストが人間の救いの元締めとして、まさにその受肉の始めから、満ち足りた神の直視を有しており、他の聖人たちと異なり、時間が進んでそれ〔満ち足りた神の直視〕に至ったのではないことは当然である。

また、他の被造物にも増して、かの〔キリストの〕霊魂は神の直視で至福になっており、神にさらに親しく結び付けられている。このような直観のうちには、ある人たちが他の人々よりもよりはっきりと神を見るという段階が認められる。彼〔神〕は事物すべての原因であるが、原因は十分知られば知られるほど、そのうちにその結果をより多く知ることができるようになる……したがって、キリストの霊魂は、他の被造物の中では神の直視の最高の完全さを保持し、神の業とその〔業の〕根拠をすべて、今あり、かつてあり、またいずれあるだろうあらゆるものを神の

うちにまったく一目で見通して、人間たちだけではなく、天使たちのうちで最上のものたちさえ照らすほどだ。

## 5.12 註釈

恵みと同じく、キリストの知恵も、大きく2つに分けることができる。すなわち、神性における知恵と、人性における知恵とに分けることができ、そして、神性における知恵は神そのものであり、父なる神の知恵のうちに生み出されたものは、すべて子なる神キリストのうちに宿ると言われる。

人性における知恵はさらに2つに分かれるとトマスは言う。そして、そのうち第1のものは神の形の知恵で、これは、神を本質において知っており、すべてのものを神のうちにおいて見ている知恵である。神は「事物すべての原因であり、原因は十分知られれば知られるほど、そのうちにその結果をより多く知ることができるようになる」。そして、その知恵をキリストは受肉の始めから、すなわち人間として存在し始めた時から有していたのであって、ほかの聖人のように、「時間が進んで」、例えば修行や善行の果てに知ようになったのではない。

## 5.2 キリストの人性における知

### 5.21 訳1 第216章「キリストが知恵に満ちていることについて」(抄訳)

しかしながら、キリストの靈魂は、神性の把握に至り得ない。すなわち……知り得る限りのことを知り尽くすという仕方の知が把握である。すなわち、どんなものでも、存在し真である限りで知り得るが、神の存在は無限であり、またその〔神の〕真理も同じである。それゆえ、神は無限に知り得るものである〔つまり、知り尽くすことができない。どれだけ知っても、さらに知り得る、つまり今は知らないことが残っている〕。また、どんな被造物も無限に知ることはできない〔ある瞬間に限界のない知を有することはできない〕。たとえ、知っていることが無限であるとしても〔すなわち、無数の結論を導きうる原理を知っているがゆえに、そこから出てくることを無限に知っていると言えるとしても〕。したがって、どんな被造物も、神を視ることで把握することはできない。また、キリストの靈魂も被造物であり、キリストのうちの、人性にのみ関わるものはすべて、創られたものである。さもなくば、キリストのうちに、人間性〔人性〕の、神性とは違う本性はないことになるだろう。しかし、神の言葉のヒュポスタシスあるいはペルソナは創られざるものであり、これは2つの本性のうちにあって1つである。以上の理由で、我々はキリストが被造物だとは、キリストの名で意味されるのはヒュポスタシスなので、端的な言い方では言わないのである。しかしながら、キリストの靈魂あるいはキリストの体は被造物であるという。それゆえ、キリストの靈魂は神を把握せず、キリストが神をその創られざる知恵で把握する……

そして考えねばならないのは、ある事物の本質を把握するのと、その力を把握するのとは、同じ概念に属するということである。すなわち、どんなものでもはたらき得るといえるのは、現実態

で存在するものである限りでのことである。それゆえ、キリストの靈魂は神性の本質を把握することが……できないので、神の力を把握するのは不可能である。だが、神がなし得ることすべてと、業がどのようにして生み出されるかを知っていたのなら、把握していたということになるだろう。しかし、それは不可能だ。それゆえ、キリストの靈魂は、神がなし得ることすべてを知らず、またどのようにしてはたらき得るのかを知らない。

## 5.22 註釈

しかしながら、トマスは、先の引用でもあくまで「他の被造物の中で最高の完全性」と言っているように、キリストの靈魂には被造物であるがゆえの限界があることを忘れない。トマスは言う。「キリストの靈魂は、神性の把握に至り得ない」。すなわち、キリストのうちの、人性にのみ関わるものはすべて、被造物であり、一方、神の言葉すなわちキリストのペルソナは創られざるものである。そして、キリストの名で意味されるのはヒュポスタシスなので、キリストが被造物である。端的に言うことはない。しかし前述のとおり、キリストの人性は被造物であるので、それゆえ、「キリストの靈魂は神を把握せず、キリストが神をその創られざる知恵で把握する」

キリストと名指す時、その名で呼ばれるのは、キリストのヒュポスタシス、すなわち神性に靈魂と身体が取り込まれた個的全体、つまり子なる神のペルソナである。それゆえに、「キリストは被造物だ」と言うのは不適切に感じられるので言わないが、それは言わないだけで、キリストの人性の部分、すなわち靈魂と身体と複合体の部分は、ありていに言えば、被造物である。そして、人性における神の形の知、すなわち、キリストの靈魂による神の直視も、被造物としての限界があるゆえに有限であり、本質において無限なる存在である神を把握する、すなわち知り尽くすことではあり得ない。有限なるものが無限なるものを知り尽くすことはないからである。神を把握するのは、キリストの靈魂ではなく、キリストそのものである。

## 5.23 訳2 第216章「キリストが知恵に満ちていることについて」(抄訳)

以上のようにして諸事物を知る以外に、つまり、被造の知性が諸事物を神の本質そのものを直視することで知るのとは別の、被造物が諸事物の知を有するやり方がある……すなわち、人間たちは、自然の秩序に則り、諸事物の理解されるべき真理を、感覚を通してまとめる……すなわち、理解されるべき形象は、彼ら〔人間たち〕の知性のうちで能動知性のはたらきにより、表象像から引き出される……

そして、被造物にもたらされた完全性はどんなものであれ、キリストの靈魂という、被造物の中で最も高いところにあるものには、ないと言ったことができないので、神の本質を視、かつすべてをその〔神の本質の〕うちに視る知以外に、3重の意味での知がそれ〔キリストの靈魂〕に帰せられるべきというのは適切だ。まずは体験によるそれ〔知〕で、他の人間たちの場合と同じく、何かを感性を通して知っているに過ぎないものである。これは人間本性に釣り合っている。

一方、他のそれ〔知〕は神によって注入されたものであり、人間の自然本性に適った知が延長

される、あるいは延長され得るものすべてを知るためのものである。すなわち、人間の自然本性が、神の言葉によって受け取られたなら、決して完全性に不足が生じないと言ってかまわない。これ〔神によって受け取られた自然本性・自然本性が神によって受け取られること〕によって人性は全体として再建されるべきだからある。また、現実態に引き入れられる前で可能態として〔の状態に〕あるものはすべて、不完全である。そして、人間の知性は、理解できるもの、すなわち人間が自然本性上〔本来のかつ現実の存在として〕理解できるものに対し可能態としてある。したがって、このようなものすべての知識を、キリストの霊魂は神により、流れ込んだ形象を通して受け取ったのである。すなわち、人間知性の可能態全体が現実態に引き込まれたことで。

しかし、キリストは人性の面では、自然の再生者であっただけでなく、恵みを育て殖やすものである。彼〔キリスト〕にはまた第3の知があることになる。すなわち、最も充溢して、恵みの神秘に属し得るあらゆるものを知るそれ〔知〕が。これら〔恵みの神秘に属するもの〕は人間の自然本性的な知を超えているが、人間たちには知恵の賜物によって知られる。すなわち、このようなものを知ることに對し、人間知性は可能態としてある。たとえ、より高い能動的作用者によって現実態に引き入れられるのであるとは言え。そして、これらを知ることができるのは、神の光によってである。

したがって、ここまで言われてきたことから、キリストの霊魂はそれ以外の被造物の間では、最高の知の段階に留まっていたことが明らかになる。神の本質が視られ、かつ他のものがそれ〔神の本質〕のうちで視られる神の直視に関する限り、また同じく恵みの神秘の知に関する限りは。また、自然本性的に知り得るものの知に関する限りでも〔最高の知の段階で〕ないことはなかった。これら3つの知のいずれの場合も、キリストに進歩の余地はなかった。しかし、感性的な事物の場合は、時間が進むにつれて感性により物体的な経験を重ねることで、段々と知っていることが多くなる。またそれゆえ、経験知に関してのみキリストは進歩する。

## 5.24 註釈

トマスは、人性における知には第2の知、神のもとに諸事物を見るのではなく、感性を通して得られる経験知があるとする。これには、感性的事物に関する知が含まれており、これに関してのみキリストは進歩する、とされる。それに対し、神からのほたらきかけによる知、すなわち、人間が自然本性に知り得ることに関する神からの注入による知と、人間が自然本性的に知り得ないことに関する神からの恵みによる知とは、「キリストの霊魂は神により、流れ込んだ形象を通して」、「すなわち、人間知性の可能態全体が現実態に引き込まれたことで」完成された。これらの知に関してキリストは、神の直視に関してと同様、受肉の始めより完成されていたのであって、進歩することはなかったということになる。

## 6. まとめ

トマスによれば、キリストにおける人性と神性との合一は、キリストの神性のうちに、人間の

靈魂と身体は合一して統合されているというものである。人間の靈魂と身体の一合がキリストの神性のうちにおける人性を形成している。すなわち、人性はキリストの神性に吸収される形で統合している。

キリストの人性は被造物であり、したがってキリストの人性が受ける恵みもまた被造物としての有限性を有している。しかし、キリストのうちにおける人性は、神性と合一している。その意味で、キリストの人性は無限の恵みを得ている。そして、それは人間の自然本性的な限界を破壊する仕方での無限化ではなく、人間の常に自然本性にとって十分なだけの恵みを發揮するという意味で無限であり、かつ無限の源泉からどのような恵みも取りだすことができるという意味で無限なのである。

知についても同様で、キリストの神性は無限の知を有するが、人性の知は有限である。しかし、人性は神性と合一しているがゆえに、神において他の諸事物を知るという形態の知に関しては最高に完全である。また、感性を通しての経験知に関しても、純粹現実態である神の知との合一によって人性における可能態的な知が現実態となっている。ゆえにキリストの人性による経験知は、人間の自然本性の範囲内でも、それを超えた恵みの領域でも完成しており、進歩の余地はなかったが、ただ感覺的事物に関する知のみ進歩したと言われる。

## 文献

1. S. Thomas Aquinas, *Compendium Theologiae*, in: *Opuscula Theologica*, vol.1, Marietti 1975
2. Thomas von Aquin, *Compendium Theologiae*, Grundriss der Glaubenslehre, uebersetzt von Hans Louis Fah, Heidelberg 1963
3. Thomas Aquinas, *Compendium of Theology*, translated by Richard J.Regan, New York 2009
4. Thomas Aquinas, *Aquinas' s Shorter Summa, St. Thomas Aquinas' s Own Concise Version of His Summa Theologica*, Manchester 1993